

寧夏回族自治区の經濟と文化

寧夏經濟与文化

石原 潤・馬 平・秋山元秀・高橋健太郎編

奈良大学文学部地理学科

目 次

序言

石原 潤 (奈良大学)	1
-------------	---

西部大开发以来, 西北地区环境变化与经济发展

张 盛林 (宁夏社会科学院科研处)	3
-------------------	---

欠发达地区城乡收入差距研究——以宁夏为例——

段 庆林 (宁夏社会科学院经济研究所)	12
---------------------	----

宁夏城乡统筹发展的思考

杨 巧红 (宁夏社会科学院经济研究所)	20
---------------------	----

宁夏同心县劳务输出现状调查

仇 王军 (宁夏社会科学院历史研究所)	28
---------------------	----

移動から考える同心県の回族

小島 泰雄 (神戸市外国語大学)	34
------------------	----

中国寧夏回族自治区の生態移民による農村空間の形成

小野寺 淳 (横浜市立大学)	48
----------------	----

銀川市における青果物流通について

石原 潤 (奈良大学)	61
-------------	----

銀川市旧市街地における宿泊施設の機能と分布特性

松村 嘉久 (阪南大学)	75
--------------	----

当前宁夏伊斯兰教的现状与问题

马 平 (宁夏社会科学院回族伊斯兰教研究所)	90
------------------------	----

论宁夏和谐民族关系的构建——银川市回汉民族关系分析——

马 敏 (宁夏社会科学院回族伊斯兰教研究所)	96
------------------------	----

宁夏回族民俗概述

金 贵 (宁夏社会科学院回族伊斯兰教研究所)	101
------------------------	-----

2007年宁夏文化产业现状以及发展对策浅析

鲁 忠慧 (宁夏社会科学院哲学与文化研究所)	110
------------------------	-----

イスラームの宗教知識人の移動にみる回族の社会的ネットワーク

高橋 健太郎 (駒沢大学)	115
---------------	-----

辺境都市銀川の歴史的都市構造

秋山 元秀 (滋賀大学)	130
--------------	-----

銀川市における歴史的町並みの保全について

曹 婷 (陝西師範大学)	138
--------------	-----

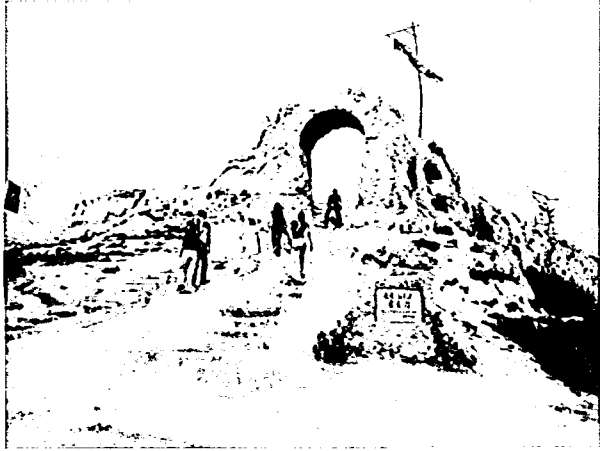


写真1 中国映画『紅高粱』のロケ地
 明清期に辺境防備のため築かれた鎮北堡遺跡は、1985年に銀川市、2005年に寧夏回族自治区の重点文物保護單位に指定された。鎮北堡西部影視城はこの遺跡そのものを活用している。1981年から2007年までの間で、86本の映画やテレビドラマがここで撮影された。(松村撮影)

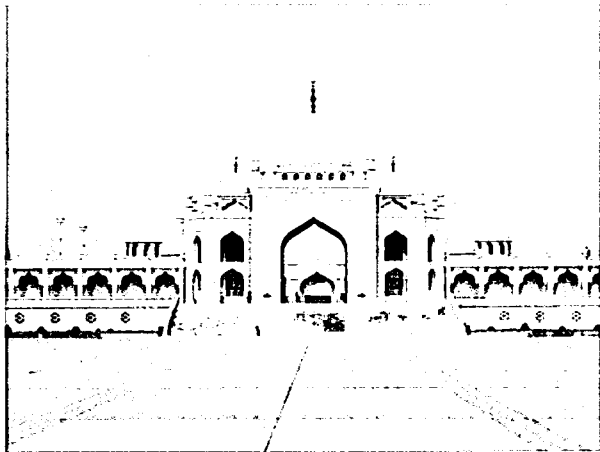
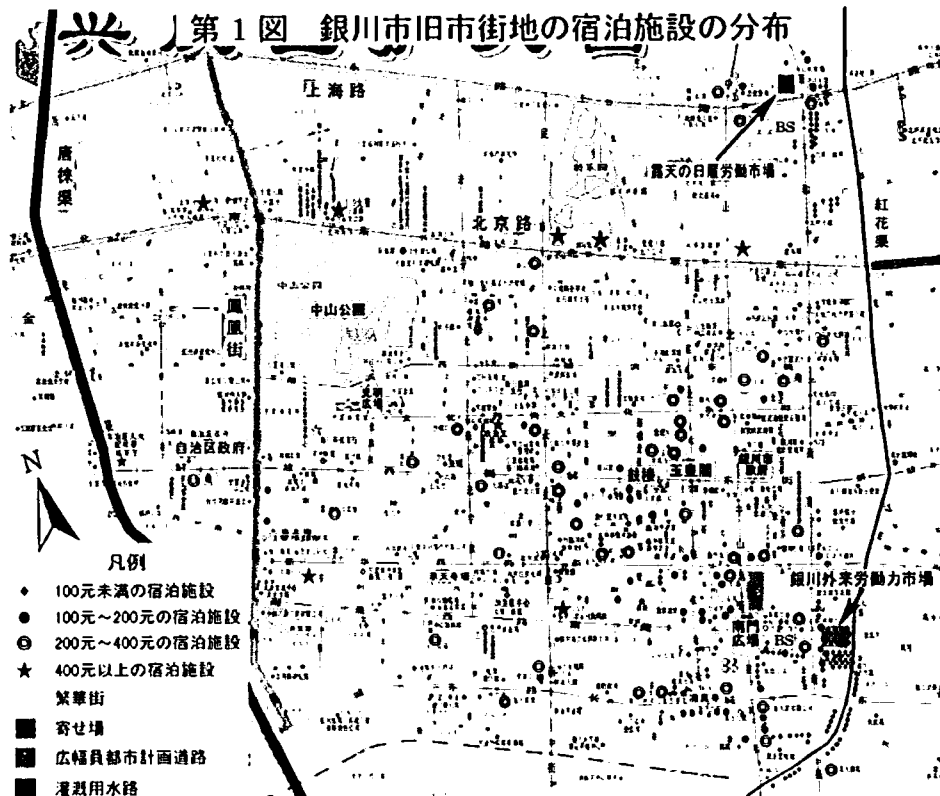


写真2 中華回族文化園の入口

銀川から南へ下る高速道路から見える中華民族文化園は、真っ白な建物でとても目立つ。園内の清真寺はまだ建設中であつた。この近くには、歴史が古く文物保護單位にも指定されている納家戸清真寺があり、銀川からの日帰り観光に最適である。



口絵写真3

序 言

石原 潤（奈良大学）

本書は日中共同研究「中国西北地方の改革開放および西部開発の進展に伴う生活空間の変容」の、第3冊目の調査報告書である。

本研究の目的は、1978年以降の改革開放政策下において、とりわけ近年の西部開発の進展の下にあって、中国西北部の都市及び農村がどのような発展をとげ、それが住民の生産・消費の諸活動にどのような変化をもたらし、彼らの生活空間がどのように変わったかを明らかにすることにある。

近年の中国は著しい経済発展を成し遂げているが、それは「東部」沿海部を中心としたものであり、最内陸部のいわゆる「西部」は発展から取り残され勝ちで、両者の間に著しい地域格差が生じている。このため中国政府は、この較差を是正すべく、「西部大開発」を最重点戦略の一つと見なしているのである。

本研究の日本側グループは、従前、「西部」の中でも湿潤気候に属する「西南部」の四川省について、その変容の実態を3冊の報告書によって明らかにした。これを踏まえて同グループは、次の課題として、「西部」の中でも乾燥気候下に属する「西北部」に対象地域を移して、その変容の実状を明らかにしようと考えた。「西北部」の入り口にあたる西安市と乾燥した黄土高原の村を取り扱った第1回の報告に続いて、第2回の報告では「西北部」の典型的な地域である甘粛省の全域と特にその内の酒泉オアシスとを採り上げた。第3回（最終回）の報告である今回の研究では、対象地域として夏回族自治区を採り上げる。寧夏回族自治区は、黄河上流の氾濫原と乾燥した黄土高原を含み、回族が人口の一定割合を占めるため、回族の自治区とされている。古くは西夏王朝の故地であったが、伝統的中国からは「辺境」と見なされて来た地域である。

本報告書を一読された読者は、市場経済化の波や西部大開発の影響が、「辺境」の寧夏回族自治区の都市や農村をも、次第に変容させつつあることを理解されよう。しかしながら回族自治区としての当地域は、回族文化を維持・復興させつつ、独自の発展を模索する試みをも行っている。また、痩せた黄土高原からは、出稼ぎ労働者が輩出する一方、黄河氾濫原への入植も進められて来た。本報告書には、これらの諸側面も触れられている。本報告書が、西部大開発を進めようとしている中国の政策担当者、あるいはそれを理解ないし援助しようとしている日本の関係者に、いくばくかの情報提供の役割をはたし得たならば、われわれの望外の喜びとするところである。

本書のための現地調査は、2007年8月初旬から8月末までの間、以下のメンバーによって実施された。

日本側メンバー

石原 潤 奈良大学文学部教授（当時）
秋山元秀 滋賀大学教育学部教授
小島泰雄 神戸市外国語大学外国学研究所准教授
小野寺淳 横浜市立大学国際文化学部准教授
松村嘉久 阪南大学国際コミュニケーション学部准教授
高橋健太郎 駒沢大学文学部准教授
曹 婷 阪南大学国際コミュニケーション学部研究生（当時）

中国側メンバー

馬 平 寧夏社会科学院回族イスラム教研究所所長
魯 忠慧 寧夏社会科学院哲学・文学研究所副所長
楊 巧梅 寧夏社会科学院経済研究所副研究員
仇 王軍 寧夏社会科学院歴史研究所助理研究員
金 貴 寧夏社会科学院回族イスラム教研究所助理研究員
馬 敏 寧夏社会科学院回族イスラム教研究所助理研究員

本書は、以上のメンバーの共同調査に基づき、資料の一部を共有しながらも、各自がテーマを分担して、分析・考察・執筆を行った諸論文からなっている。

本共同研究は、財政的には、日本学術振興会の2007年度科学研究費基盤研究（A）「中国西北地方の改革開放および西部開発の進展に伴う生活空間の変容」（課題番号：17251010、研究代表者：石原 潤）によって全面的に支えられたものである。記して感謝の意を表したい。

調査にあたっては、寧夏社会科学院回族イスラム教研究所の馬 平所長が陣頭指揮を取って下さり、魯 忠慧、楊 巧梅、仇 王軍、金 貴、馬 敏の各先生が、日本側の参加者に対して多大の援助を与えて下さった。魯 忠慧先生と曹 婷さんは、通訳の役割をもはたして下さった。さらに、本書の出版にあたっては、寧夏社会科学院科学処の張 最林先生、及び寧夏社会科学院経済研究所所長の段 慶林先生が玉稿を寄稿いただいた。日本側研究者の中では、寧夏社会科学院に留学経験を持つ高橋健太郎氏が、日中両グループの橋渡し役として、さまざまな調整・連絡に尽力いただいた。これら全ての方々に対して、深甚の謝意を表したい。

銀川市旧市街地における宿泊施設の機能と分布特性

松村嘉久（阪南大学国際コミュニケーション学部）

1. はじめに

（１）「寧夏」・「回族」を見せる難しさ

観光という文脈で集客力を獲得するには、他地域と比較して、ナンバーワンかオンリーワンの観光資源を有するのかが、重要な鍵となる。寧夏回族自治区の観光資源は、潜在的な魅力こそ高いものの、この二つの要素が弱い。第 11 次五ヶ年計画（2006—2010 年）の綱要で、寧夏を「塞上江南，神奇寧夏」というイメージで売り出すことが決まり、寧夏の代表的な観光資源は「一河両山両沙両文化」と表現された¹。一河は黄河，両山は六盤山・賀蘭山，両沙は沙湖・沙坡頭，両文化は回族文化・西夏文化のことである。ところが最初に挙げられた黄河は、寧夏以外でも観光対象となっていて、むしろ寧夏以外の方が有名である。両沙（沙湖旅游景区・沙坡頭旅游景区）は 5A 評価を得ているが、現状において国内的な知名度は低い。寧夏域内に残存する万里の長城も、黄河と同様、寧夏がナンバーワンの観光資源ではない。

賀蘭山の岩画や西夏文化を代表する西夏王陵などは、寧夏ならではの観光資源といえる。しかしながら、この二つの知名度も低く、遺跡であるがゆえに、スペクタクル化するのが難しく、娯楽的な要素も付加し難い。観光という営為が成熟する途上にある現代中国において、この種の観光資源はあまり人気がない。寧夏の区都・銀川市は、1986 年に国家レベルの歴史文化名城に選ばれている。しかしながら、その核心部分である旧市街地の都市空間は、回族の文法ではなく、漢族の文法で編成されている。旧市街地の空間編成からは、清真寺（モスク）と清真食堂（イスラム教徒向けのレストラン）が点在することを除いて、イスラム風情は見出せない²。旧市街地での観光名所は、鼓楼・玉皇閣・南門・承天寺塔など、中国の歴史文化都市ならばたいい残存するか復元されている建造物であり、他の都市のそれらを凌駕するほどの魅力もない。

寧夏の代表的な観光資源として、回族文化も挙げられている。しかしながら、観光客に向けて「回族」を見せるのはとても難しい。回族と漢族とを分ける差異は何かという問いに対して、一般的には、人種的民族な差異はほとんどなく、イスラム教を信じるのか否かで分けるという説明がなされる。極論するならば、民族識別が実施される以前に、イスラム教に改宗していた漢族とその子孫が回族であるともいえる。偶像崇拝を行わないイスラム教は、礼拝や断食など日常生活での行動そのものが宗教的営為となる活きた宗教である。つまるところ、「回族」を見せるという営為は、「イス

¹ 「寧夏回族自治区国民經濟和社会發展第十一个五年計画綱要」、『寧夏回族自治区人民政府』（<http://www.nx.gov.cn/>）より検索。本稿におけるインターネット情報は全て、2008 年 6 月末現在でその存在を確認した。

² 沿海部大都市などでは、イスラム料理を提供するレストランを特に「清真」と表示する。寧夏では、人口比率から見ると漢族がマジョリティであるが、政治的にはマイノリティとの建前から、漢族のレストランの方を特に「漢餐」と表示している。

夏は中国系同胞の来訪者が少なく、国際観光が伸び悩む一因となっている。

一方、国内観光客数は、SARS騒動の影響で人口移動が鈍った2003年を除いて、年々順調に増加してきた。2007年の国内観光客数は、前年よりも大幅に増え730万人回に達している。このうち405万人回が宿泊客、325万人回が日帰り客で、対前年比で日帰り客の伸び率の方が高かった⁶。2007年の観光総収入31.6億元は、域内GDPの5%を初めて超えたが、他の1級行政区と比較するとまだ低い水準にある。寧夏の観光は、ようやく動き出した国内観光に牽引され、遅々とした歩みながらも、確かな成長の途上にあることは間違いない。ただし、寧夏の観光は低いレベルからのテイクオフであり、規模自体がまだとても小さいといわざるを得ない。

地域別の観光統計で、寧夏回族自治区における区都・銀川市の地位を確認しておきたい(第2表参照)。国際観光においては、域内で銀川市が占める比重は、客数で78.6%、収入で84.9%と高く、観光ゲートウェイの役割を果たしている。ただし寧夏の場合は、国際観光そのものの規模が小さいので、観光全体としての大勢にほとんど影響しない。大勢を決する国内観光の方を見てみると、客数(33.8%)でも収入(52.4%)でも、銀川市の比重は決して高いとはいえない。

第1表 寧夏回族自治区の観光統計

年度	観光客数			観光収入		
	国際観光客数 (人回)	うち外国人 (人回)	国内観光客数 (万人回)	国際観光 (万米ドル)	国内観光 (億元)	観光総収入 (億元)
2000	7,807	5,792	243	272	9.1	9.3
2001	8,668	5,668	280	273	10.8	11.0
2002	6,018	4,117	305	161	12.0	12.1
2003	3,049	2,217	274	89	10.2	10.3
2004	7,041	5,446	404	171	15.0	15.1
2005	8,162	6,641	500	230	17.6	17.7
2006	8,665	7,847	593	243	25.5	25.7
2007	9,373	8,422	730	261	31.4	31.6

注)『寧夏旅游政務網』(<http://www.nxta.gov.cn/>)より。

第2表 寧夏回族自治区の地域別観光統計(2007年)

観光統計項目	自治区全体	銀川市	比重(%)	石嘴山市	吴忠市	固原市	中衛市
国際観光客数(人回)	9,373	7,371	78.6	247	254	220	1,281
国際観光収入(万米ドル)	260.76	221.45	84.9	8.87	4.04	3.17	23.23
国内観光客数(万人回)	730.39	246.93	33.8	123.91	117.11	108.38	134.06
国内観光収入(億元)	31.44	16.49	52.4	3.37	3.57	2.62	5.39

注)『寧夏旅游政務網』(<http://www.nxta.gov.cn/>)より。

⁶ 「2007年寧夏旅游經濟發展統計公報」、『寧夏旅游政務網』(<http://www.nxta.gov.cn/>)より。

ラム教」を見せることになり、観光という文脈のなかで、可視化しスペクタクル化するのがそもそも難しい。見る側がマジョリティの漢族で、見られる側がマイノリティの回族という構図のなか、活きた宗教的営為を観光対象とするならば、宗教問題や民族問題へと発展する危険性も高い。

「大分散、小集居」の民族分布を特徴とする回族は、寧夏に来る国内観光客にとって、最も身近な少数民族である。国内観光客の客源地である沿海部大都市には、回族が集住する地域がたいていあり、人口的にも政治的にもマイノリティとして生活しているため、むしろ寧夏より強固なエスニシティを維持している場合が多い。加えて、エスニック・ツーリズムでイスラム風情が対象となると、中国国民のイメージでは、寧夏の回族よりも、新疆ウイグル自治区のウイグル族やカザフ族の方が鮮明に浮かぶに違いない。新疆の諸都市の空間編成からは、銀川市よりも色濃くイスラムの文法が見出せ、そこに住む少数民族は、漢族と明らかに異なる風貌で異なる言葉をしゃべり、色鮮やかな民族衣装で歌い踊る、とのイメージが定着している。寧夏が回族文化を観光資源に掲げて、成功への道は険しく遠い。

ここまで見てきたように、寧夏の観光振興を考える時、既存の観光資源の比較優位性が確保できないことから、「寧夏」を見せる難しさと、「回族」を見せる難しさが常に頭を悩ませる。そこで寧夏では、テーマパークなど新しい観光空間の創造が試みられている。中国映画の名作『紅高粱』³も撮影された鎮北堡西部影視城は、映画やテレビドラマのロケ現場を見せるテーマパークで、国内観光客の人気を集めている（口絵写真1参照）。鎮北堡西部影視城の隣接地域では現在、大規模な遊園地やテーマパークの建設計画が立ちあがっていて、このあたりの景観は一変するかもしれない⁴。

2006年10月開業の中華回族文化園は、回族文化を展示するテーマパークである（口絵写真2参照）。この種の施設は大都市や少数民族地帯でよく見かけるが、ここは歌舞や飲食の提供といった娯楽的要素はなく、テーマパークというよりも、回族やイスラム教の歴史文化を学習する博物館的存在となっている。残念ながら訪れる観光客は少ない。また寧夏では近年、様々な観光イベントを実施して、観光地としての知名度を高め、観光客を集客しようと試みている⁵。以上のような取り組みのもと、寧夏の観光動態がどのように推移してきたのか、次で確認したい。

（2）寧夏・銀川の観光動態

寧夏の国際観光は驚くほど低い水準にある。21世紀に入って、寧夏を訪問する年間国際観光客数が1万人回を超えたことはない（第1表参照）。中国の国際観光の急成長は、香港・マカオ・台湾など、中国系同胞たちの来訪に誘発され支えられてきた。寧

³ 1987年に封切られた張芸謀の初監督作品で、邦題は『紅いコーリャン』。1988年のベネチア国際映画祭で金熊賞を受賞した。

⁴ 4.8億元の投資を8年間で回収する開発計画で、灌漑・屯田・中華民族文化などを展示し、水上娯楽も楽しめる観光施設となる予定である。「鎮北堡水上旅游区開発」、『寧夏回族自治区人民政府』（<http://www.nx.gov.cn/>）より。

⁵ 例えば、国際モーター旅游節（2000・2001・2002年）、大沙漠・黄河国際旅游節（2000・2001・2002年）、冰雪旅游文化節（2004・2005・2006年）、中国西北風情“愛之旅”七夕情人節（2006・2007年）などが定例化されてきた。この他に単年度の観光イベントも少なくない。

伸び悩む寧夏の観光振興の切り札として、2006年から3年間の期限付きで、寧夏は観光振興に資する活動に対して報奨金を支給する、という極めて具体的なインセンティブを定めた⁷。このような踏み込んだ観光振興施策を展開している1級行政区は、おそらく中国で寧夏だけだと思われる。新たな観光空間の創造やイベント開催からインセンティブまで、寧夏の観光振興に対する情熱は注目に値する。しかしながら、それは寧夏の観光が、現状において低迷している裏返しでもある。インセンティブの効果からか、国内観光はテイクオフの兆しを見せているが、第1表・第2表に示した観光動態からは、寧夏の観光集客が低い水準にあり、銀川の地位も決して高くない現状が浮かび上がる。

寧夏の区都・銀川市は、歴史文化名城（1986年）だけでなく、2000年に第二回中国優秀旅游城市にも選出されている。寧夏は1級行政区であり民族自治地方でもあり、銀川はその区都である。両沙の5A評価も含めて、この種の全国的な格付けにおいては、他地域とのバランスからも、少数民族地帯への政治的配慮という観点からも、寧夏と銀川は実力以上の評価が与えられている気がしてならない。しかしながら、銀川市は実態として、優秀な観光都市というよりも、むしろ寧夏の政治経済の中心地である区都としての機能の方が際立つ。区都・銀川に様々な目的で集まる来訪者は、間違いなく観光客数を上回る。本稿では、銀川市旧市街地における宿泊施設の機能と分布特性について論じるが、国内外からの観光客が利用するところだけでなく、区都・銀川への様々な来訪者が利用するところも視野に入れて分析したい。

2. 中国における宿泊施設について

（1）涉外飯店から旅游飯店へ

日本の宿泊施設の場合、1948年制定の「旅館業法」と1957年制定の「旅館業法施行令」で、ホテル・旅館・簡易宿所・下宿の区別と構造設備の基準が定められている。ラブホテルに関しても、いわゆる「風俗営業適正化法」で規制がかかっている⁸。しかしながら、宿泊施設によっては、ホテルなのか旅館なのか、ビジネスホテルなのかラブホテルなのか、境界が曖昧で判断し難い場合も多い。宿泊施設の名称からその内実が判別し難いことも多々あり、近年では、既存の法律が想定していない宿泊機能を備えた施設も出現してきている⁹。法制度と実態との乖離が少なからず存在するものの、日本は宿泊施設を系統的に規制する法体系を築き上げてきた。

中国の宿泊施設の場合は、どのような規制がかかり、発展してきたのであろうか。毛沢東時代から1980年代初頭にかけての中国では、国有か集団所有の招待所の類が存在するくらいであった。厳しい人口移動の規制のなか、宿泊施設の数は一極端に少なく、

⁷ 「寧夏回族自治区旅游局加快旅游業發展獎勵办法」（2006年2月7日付けで通知）、『寧夏旅游政務網』（<http://www.nxta.gov.cn>）より。

⁸ 1948年制定の「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」および1984年制定の同法の施行令で、店舗型風俗特殊営業の4号営業として規制されている。施行令が定める基準とラブホテルの実態が異なるため、届け出ていない偽装ラブホテルも多い。

⁹ 24時間営業の商業施設は、宿泊できる施設として利用されている。例えば、カラオケボックス、マンガ喫茶、映画館、サウナ、健康ランド、ファーストフード店、一部のインターチェンジや道の駅などである。

単位などからの紹介状がなければ泊まれなかった。1982年に中国の国際観光鎖国が解かれると、外国人観光客を受け入れて居留管理する「涉外飯店」という概念がまず生まれた。1980年代半ばからは「旅游涉外飯店」という呼称が一般的になり、一つ星から五つ星までの五段階でそれらを格付けする制度が整備されてきた¹⁰。

90年代半ばから、中国経済が急成長を遂げ国内観光が盛んになるにつれて、「涉外」が持つ意味は徐々に薄れてゆく。21世紀に入ると、北京・上海・広州などでは「涉外飯店」制度が廃止され、外国人観光客は基本的にどの宿泊施設でも利用できるようになった。宿泊施設の星の数を決定するハード面の中国国家標準は、1993年に初めて「旅游涉外飯店星級的劃分与評定」として公表されたが、2003年の改正でここからも「涉外」の文字がきえた。最新版の「旅游飯店星級的劃分与評定」(GB/T14308—2003)によると、「旅游飯店 (tourist hotel)」の定義は、「夜間に時間単位で観光客に飲食や関連するサービスを提供する宿泊施設」とされ、「賓館・酒店・旅館・旅社・賓舍・度假村・俱樂部・大廈・中心など」の名称で呼ばれるとされている¹¹。

(2) 旅游飯店以外の宿泊施設について

さてここで、旅游飯店として格付けされてきたのが、中国に存在する多様な宿泊施設の一部に過ぎないことを忘れてはならない。国内観光客や出稼ぎ労働者などが動き出し、中国国内の人口の流動性が高まるのと並行して、特に90年代から、様々な主体が様々な形態で宿泊産業界に参入していった。日本の場合、宿泊産業への参入は、旅館業法に基づいて、都道府県知事からの許可を得なければならず、施設の構造設備や設置場所に問題があれば許可されない。中国の場合、旅游飯店としての格付けを望まなければ、宿泊産業への参入障壁となる法律は、管見の限り存在しない。レストランを併設するならば、衛生面での許可が必要な程度である。中国各地の統計年鑑で紹介される宿泊施設関連の統計は、ほぼ例外なく旅游飯店のみの数字である。

旅游飯店以外の広範な宿泊施設も視野に入れた全国的な調査は、後にも先にもただ一度だけ、2000年に行われている。この調査では「旅游住宿設備」という用語を初めて使い、涉外飯店・社会旅館・个体旅館という三つのカテゴリーで分析している¹²。「旅游」との名を冠しているが、観光とはおよそ無縁な宿泊施設も含まれている。三つのカテゴリーの定義は明示されていないが、国家旅游局が格付けで管理する涉外飯店以外の宿泊施設（非涉外飯店）をまず想定し、その経営主体が企業事業単位であれば社会旅館、个体営業戸であれば个体旅館に分類したと推察される¹³。1999年末現在の少し古い資料であるが、その内容は興味深い。

¹⁰ 例えば、「中華人民共和国評定旅游（涉外）飯店星級的規定」（1988年8月1日制定）や「关于对全国旅游涉外飯店按五星制評定星級的通知」（1988年8月22日制定）など。

¹¹ 「旅游飯店星級的劃分与評定」、『寧夏旅游政務網』（<http://www.nxta.gov.cn>）より。中国での宿泊施設の呼び方は実に多様で、宿泊施設の名称を聞けばそのランクがおおよそ想像できるが、名称と内実が一致しない場合も多々ある。

¹² 「2000年全国旅游住宿設備統計調查資料」、『中華人民共和国国家旅游局』（<http://www.cnta.gov.cn/>）より。

¹³ 唐超は社会旅館の87%以上が国有・集体単位で、残りも個人経営でないとしている。唐超「我国社会旅館業的現狀与發展策略研究」『財貿研究』2002年5号、115—118頁。

まず施設数で見ると、涉外飯店は宿泊施設全体のわずか2.8%に過ぎない（第3表参照）。客室数やベッド数の比重でも10%代を占めるに過ぎないが、従業員数では25.5%、営業収入では44.5%も占める。1施設あたりの客室数を比較すると、127室を有する涉外飯店と、9室しかない零細な个体旅館とのコントラストが強烈である。やはり涉外飯店は数こそ少ないが、規模が大きく収益も高いようである。个体旅館の1施設あたりの従業員数3名は、まさに家族経営を彷彿させる。社会旅館は施設数で31.9%を占めるにとどまるが、接待数で73.8%を占めた実績は注目に値する。社会旅館は涉外飯店と个体旅館の中間的存在として捉えられるが、企業事業単位が経営するその実態は、規模の大小や施設の充実度などでかなりの格差があると思われ、平均的な社会旅館のイメージが描けない。

次に、地区別に同様の三者を示した第4表を見よう。北京・上海・広東・海南・雲南など、大都市圏か観光業の盛んなところで、涉外飯店と社会旅館の比重が高く、个体旅館の比重が低い傾向が確認できる。一方、河北・内蒙古・安徽・湖南・貴州など、相対的に経済発展が遅れ、広大な農村地帯を抱えるところで、个体旅館の比重が高い。本稿が研究対象とする寧夏を見ると、1,040軒の宿泊施設のうち、37軒が涉外飯店、373軒が社会旅館、630軒が个体旅館である。寧夏における三者の比重は、全国と比較して、涉外飯店と社会旅館がやや高く、个体旅館がやや低い。ちなみに、2007年末の統計で寧夏の涉外飯店は59軒である。変化の激しい中国の現在を1999年の調査から推測できないが、涉外飯店・社会旅館・個人旅館という三者の構造は、そう大きく変化していないと考える。

80年代から90年代初頭にかけて、中国国内における宿泊需要は、国際観光客や富裕な国内観光客が中心であり、涉外飯店で需要がかなり満たせる状況であった。90年代半ばからは、国内観光ブームに火がつき、出稼ぎ労働者たちも動き出したため、これまでにない客層の受け皿となる新たな宿泊施設の需要が急速に高まってきた。規制する法律も無い社会旅館や個人旅館は、参入障壁が低いため、圧倒的な需要の急増に応じる形で、今なお数を増やし続けている。

第3表 中国における宿泊施設の概況(1999年末)

指標(単位)	涉外飯店	比重(%)	社会旅館	比重(%)	个体旅館	比重(%)	総数
施設数(万)	0.70	2.8	7.99	31.9	16.39	65.4	25.08
客室数(万)	88.94	15.3	345.86	59.5	146.96	25.3	581.76
1施設あたりの客室数	127	—	43	—	9	—	23
ベッド数(万)	176.98	13.7	781.54	60.3	336.65	26.0	1,295.18
接待数(億人回)	1.54	13.5	8.41	73.8	1.44	12.6	11.39
従業員数(万)	121.60	25.5	311.42	65.2	44.69	9.4	477.71
1施設あたりの従業員数	174	—	39	—	3	—	19
営業収入(億元)	846	44.5	968	50.9	87	4.6	1,901
1施設あたりの営業収入(万元)	1,209	—	121	—	5	—	76

注) <http://www.cnta.gov.cn/html/2008-6/2008-6-2-14-52-47-28.html>より。

第4表 地区別の宿泊施設数(1999年)

地区	涉外飯店	比重	社会旅館	比重	個体旅館	比重	総数
全国	7,035	2.8	79,864	31.8	163,920	65.4	250,819
北京	375	8.2	3,413	74.3	803	17.5	4,591
天津	84	5.6	959	64.0	456	30.4	1,499
河北	171	0.9	3,144	16.7	15,459	82.3	18,774
山西	90	1.4	2,056	32.5	4,171	66.0	6,317
内蒙古	84	0.9	1,457	15.5	7,837	83.6	9,378
遼寧	279	3.1	3,144	34.9	5,583	62.0	9,006
吉林	131	2.0	2,108	32.5	4,249	65.5	6,488
黒竜江	154	1.4	2,752	25.5	7,874	73.0	10,780
上海	286	8.5	2,109	63.0	951	28.4	3,346
江蘇	402	2.5	6,196	39.0	9,300	58.5	15,898
浙江	405	2.8	3,864	26.9	10,078	70.2	14,347
安徽	203	1.2	2,726	16.3	13,757	82.4	16,686
福建	224	3.7	2,072	34.6	3,686	61.6	5,982
江西	95	1.5	2,101	33.1	4,152	65.4	6,348
山東	384	2.7	4,385	30.4	9,634	66.9	14,403
河南	147	1.3	4,482	38.6	6,989	60.2	11,618
湖北	320	3.1	3,967	38.9	5,912	58.0	10,199
湖南	198	0.2	2,879	2.7	105,558	97.2	108,635
広東	1,193	12.9	3,891	42.0	4,187	45.2	9,271
広西	236	3.1	2,534	33.2	4,871	63.7	7,641
海南	231	11.2	973	47.0	867	41.9	2,071
重慶	65	1.7	1,969	50.8	1,841	47.5	3,875
四川	227	1.5	5,148	33.6	9,959	64.9	15,334
貴州	52	0.8	1,303	19.7	5,266	79.5	6,621
雲南	603	7.1	3,411	39.9	4,531	53.0	8,545
チベット	45	—	—	—	—	—	45
陝西	72	0.8	2,922	31.1	6,414	68.2	9,408
甘肅	51	1.4	1,856	51.9	1,667	46.6	3,574
青海	15	1.5	361	36.4	616	62.1	992
寧夏	37	3.6	373	35.9	630	60.6	1,040
新疆	176	5.7	1,309	42.2	1,620	52.2	3,105

注) <http://www.cnta.gov.cn/html/2008-6/2008-6-2-14-52-47-28.html>より。

法的には野放し状態のなか増え続けてきた社会旅館や個人旅館に対して、最近ようやく一部の大都市で規制をかける動きが出だした。例えば成都市は、社会旅館を管理する基本法を設け¹⁴、設備などのハード面やサービスなどのソフト面の基準も初めて示

¹⁴ 『成都市社会旅館管理弁法』(2007年1月1日施行)。この弁法での社会旅館は「星付きの旅游飯店以外で社会に向かって有償で宿泊を提供する飯店・賓館・酒店・招待所・度假村・旅店・旅社など」と定義されているので、個人旅館も含めている。

し、それに適合しない社会旅館を整理整頓する方針を打ち出した¹⁵。北京市や上海市などの大都市でも、特別な法整備は行っていないが、既存の法律を活用して社会旅館や個人旅館の違法行為を取り締まっている。今後は成都市の成り行きを見守って、追随する都市が増えてくるのではなかろうか。

3. 銀川市旧市街地における宿泊施設の機能と分布特性

寧夏には 2007 年末現在で 59 軒の旅游飯店があり、その内訳は、四つ星が 5 軒、三つ星が 38 軒、二つ星が 16 軒となっている。最高級の五つ星はまだない。三つ星以下の宿泊施設を評定して格付けする権限は、自治区レベルに任されていて、毎年旅游飯店の大半の審査を行い、二つ星と三つ星との間での昇格や降格を発表している¹⁶。審査は厳密に行っているようで、設備改善ができないところ、サービスが著しく低下したところなどは降格されている。

さてこの章では、星付きの旅游飯店だけでなく、国内観光客や区都・銀川市への様々な来訪者が滞在する宿泊施設も含めて、銀川市旧市街地に立地する全ての宿泊施設の悉皆調査の成果を報告する。悉皆調査は 2007 年 8 月 14 日から 24 日の間に、旧市街地の全ての街路を歩き、発見した宿泊施設について、外観とフロントの様子を目視で観察した。加えて、施設紹介のパンフレットなどがあれば入手するとともに、最低限、標準客室料金は必ず確認した¹⁷。寧夏に限らず、中国での客室料金は混乱気味である。インターネットの宿泊予約サイトを経由すると驚くほど安くなり、フロントに表示している料金からその場の交渉で値引きすることもある。本稿が標準客室料金としたのは、フロントで確認したスタンダードのツインルームの正規料金である。また、悉皆調査を進めるなかで、代表性が高いと思われるところ、銀川市旧市街地の都市構造と密接に関連するところについては、従業員や周辺住民に聞き取り調査も試みた。

悉皆調査で確認された銀川市旧市街地の宿泊施設は 274 軒であった（第 1 図および口絵写真 3 参照）。標準客室料金の設定は宿泊施設の内実とも関連するが、本稿では以下の四つの階層に区分して、宿泊施設の機能、分布特性、都市構造との関連などについて分析を進めていきたい。

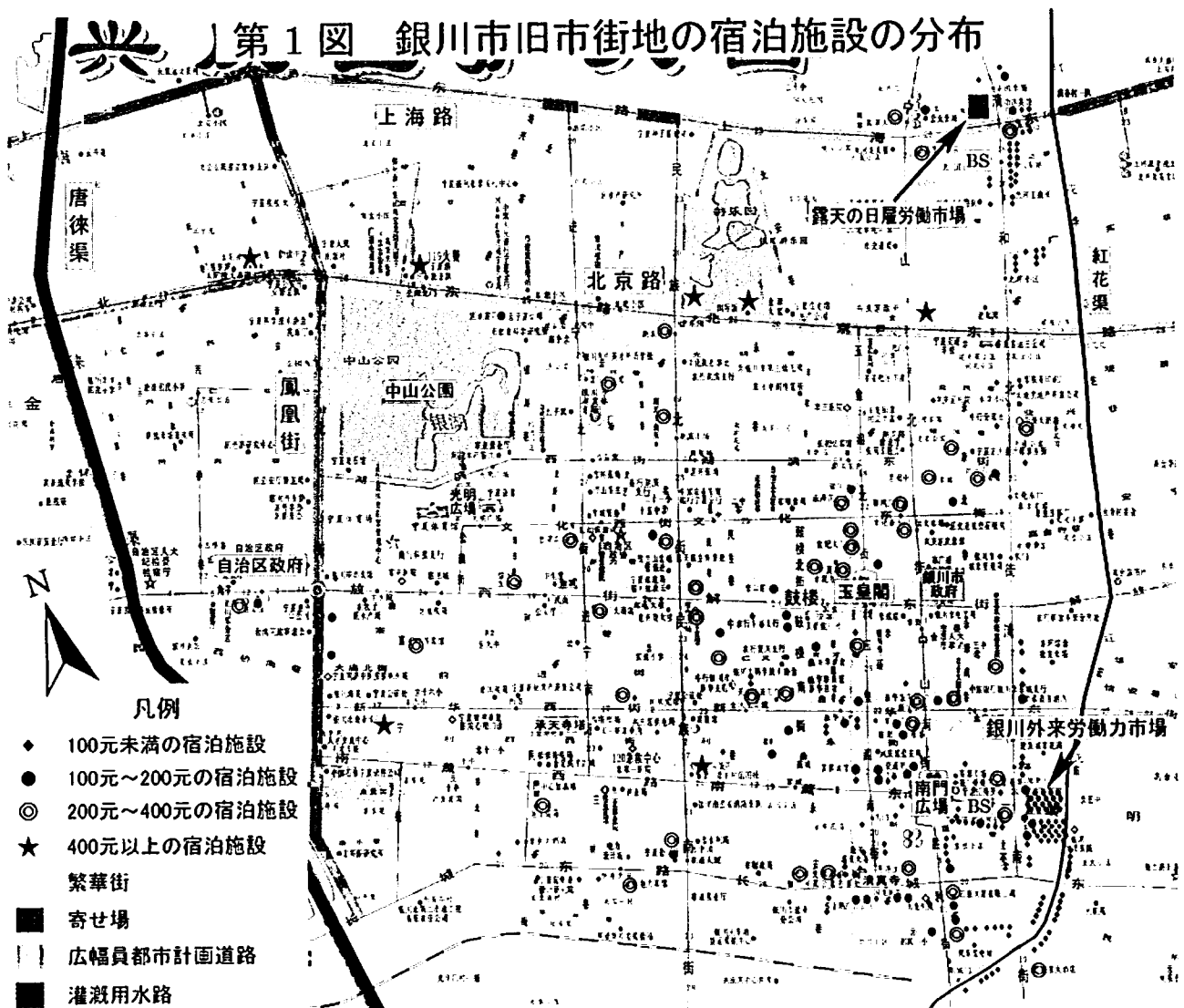
- (1) 400 元以上：7 軒
- (2) 200 元以上 400 元未満：45 軒
- (3) 100 元以上 200 元未満：43 軒
- (4) 100 元未満：179 軒

既述した旅游飯店は全て (1) か (2) に属する。社会旅館はたいてい (2)・(3) に属するが、稀に (4) に入る場合もある。个体旅館はほぼ (4) に属すると考えてよい。100 元未満の宿泊施設数が 179 軒と多いが、その内実からさらに二つのタイプに分けて分析する。

¹⁵ 『成都市社会旅館施設設備与服務質量規範整治標準』という基準を添付して、『成都市清理整頓社会旅館工作实施方案』が 2007 年 10 月 31 日付けで通知された。

¹⁶ 例えば、「関于 2007 年度全区旅游星級飯店復核工作情況的通報」、『寧夏旅游政務網』(<http://www.nxta.gov.cn>) より。

¹⁷ 外観とフロントの様子から内実を判断できる安宿の一部は省略した。



(1) 400 元以上の宿泊施設の機能と分布特性

標準客室料金が 400 元を超える 7 軒のうち、5 軒は広幅員の都市計画道路である北京路沿いに立地している（写真 1 参照）。北京路は旧市街地繁華街から北へかなり離れていて、最新の 1996 年都市計画に基づき拡張された。北京路沿いには緑豊かな中山公園や遊楽園などが配置され、稠密に建造物が充填された旧市街地繁華街とは対照的に、ゆったりとした空間利用がなされている。もう一本北側の上海路沿いには、まだあまり建造物がない。残りの 2 軒も旧市街地繁華街から少し離れた周辺部で、広幅員道路が交差する四つ角に立地している。全てが旧市街地の繁華街内ではなく、計画的に都市域を拡張するなかで、新たな市街地の大動脈となる街路沿いに立地している点は、注目しておきたい。また名称に関しては、酒店か飯店を使用している。

7 軒は 2003 年から 2007 年までの間に開業あるいは大改装していて、施設全体がとても新しい点で共通する。いずれも部屋数が 100 室を超える大規模なものばかりである。ホテルの開発経営は、他地域の企業・投資集団が、地元寧夏の資本や公的機関を巻き込んで共同出資して行われているところが多い。この階層の 7 軒のうち、寧夏で最高ランクの四つ星が 1 軒、三つ星が 2 軒である。残りの 4 軒は開業して間もないた

め、07 年夏の調査段階では、星による格付けをまだ受けていなかった。ちなみに銀川市旧市街地には四つ星ホテルが 3 軒あるが、あと 2 軒の宿泊料金は 400 元以下に設定されていた。格付けと宿泊料金が必ずしも相関していない点は興味深い。

宿泊客層は当然のことながら、金銭的に豊かな国際観光客や国内の観光客・ビジネス客が中心で、コンベンション客も少なくない。いずれも立派な外観と豪華な内装のホテルで、正規料金はとても高く設定されているが、ネット予約でのディスカウント率も高く、フロントでの値引きも行われている。そもそもこの階層がターゲットとする来訪者が少ないなか、ここ数年の開業ラッシュで、過当競争に陥っているように見受けられた。当初から存在する正規料金は、有名無実化している。



写真 1 北京路沿いの四つ星ホテル

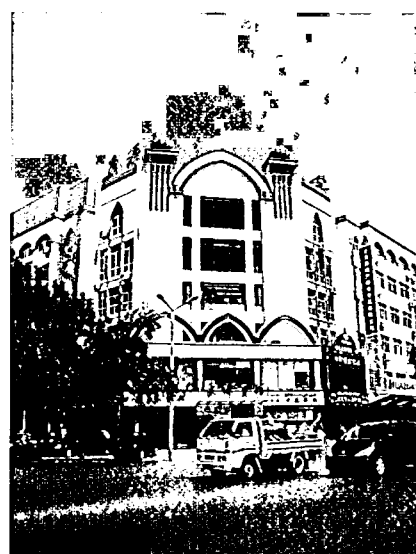


写真 2 四つ角が玄関のホテル

（2）200 元以上 400 元未満の宿泊施設の機能と分布特性

この階層の 45 軒の大部分は、二つ星から四つ星までの旅游飯店である。利用者層は、一般的な国際観光客や国内の観光客・ビジネス客を中心として、コンベンションで利用されることも少なくない。コンベンションの開催頻度は、価格が手頃なこともあり、400 元以上のところよりも、この階層の方が多いかもしれない。名称に関しては、酒店・飯店に加えて、賓館・商務賓館・大厦が使われている。規模は客室数にして、70 室から 150 室くらいである。

この階層の宿泊施設は、旧市街地繁華街内で再開発にかかった地域か、旧市街地繁華街から少し離れたところに立地している。いずれの場合も、幹線道路と幹線道路が交差する四つ角に立地するところが多く、ホテルの玄関部分が四つ角に面している（写真 2 参照）。四つ角でない幹線道路沿いに立地する少数の事例は、繁華街から少し離れたところばかりである。

開業年代に関しては、400 元以上の施設と同様、21 世紀に入って開業したところもあるが、80 年代後半から 90 年代にかけて開業したところが主流である。旧市街地繁華街の再開発地域に立地するところは、いずれも比較的最近に開業している。旧市街地繁華街から少し離れて立地しているのは、80 年代後半から 90 年代にかけての市街地拡張と絡んで建設されたものが多い。それらの施設は、その後改装して設備の維持

改善に成功したのかが、現在の標準客室料金の設定に大きな影響を及ぼしている。この階層のなかで比較的高い料金設定をしているところは、たいてい、開業して間もないか、最近に改装工事を行っている。開発経営主体に関しては、主に企業・投資集団やそれをバックに設立された有限・株式会社であるが、80年代から90年代に開業した宿泊施設のなかには、地方政府系の部門や公的機関が絡んだものも少なくない¹⁸。

（3）100元以上200元未満の宿泊施設の機能と分布特性

100元以上200元未満の施設は43軒を数えたが、この階層の主な客層は、国内の観光客・ビジネス客である。厳密にいうならば、この階層に旅游飯店は存在しないので、国際観光客は宿泊できない。しかしながら、近年この規制は有名無実化しつつあるので、数は極めて少ないであろうが、安宿志向の外国人バックパッカーがこの階層に宿泊する可能性はある¹⁹。この階層の宿泊施設でコンベンションが開催されることは、まずあり得ない。規模は客室数で30室から70室くらいのところが主流である。名称に関しては、賓館・酒店などが多く、招待所・商務賓館との呼び方も数軒ある。

分布状況を見ると、旧市街地繁華街およびその周辺に立地するところが多数を占める。規模は大きくはないが、立地条件は決して悪くない。そもそも施設に対する初期投資を抑制して、低料金志向の観光客やビジネス客を狙い、比較的最近に開業した商務賓館（ビジネスホテル）もある。しかしながら、80年代半ばから90年代にかけて開業した比較的立派な外観のホテルで、その後施設の老朽化が進むが改善されることなく、標準客室料金を安く設定せざるを得ないところが大半である（写真3参照）。開発経営主体は部門や単位などから会社組織まで多様であるが、個人レベルで開発経営を行っているところはないと考えてよい。

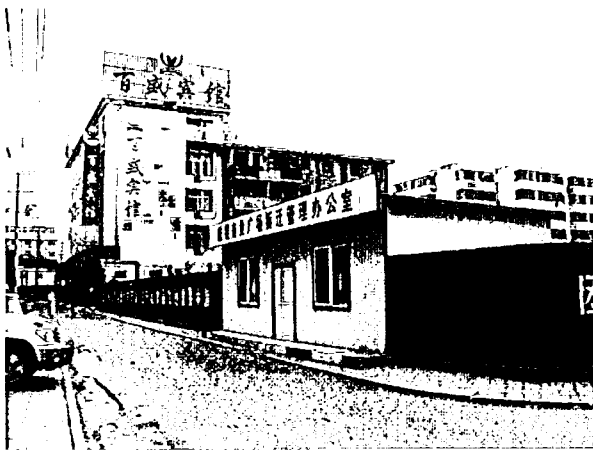


写真3 再開発地域に残るホテル



写真4 再開発前後のインナーシティ

¹⁸ 例えば、電力局・郵電管理局・地震局などが宿泊施設を経営している。一般に、中国の政府系部門は市街地の一等地に広大な敷地を確保している。そのため、敷地の一部を商業空間として開発利用することが多く、宿泊施設の経営もその延長線上にある。

¹⁹ 銀川に限らず、中国の大都市の旅游飯店は、かつて存在したドミトリーをなくしている。その結果、安宿志向の外国人バックパッカーのなかには、旅游飯店でないホテルに宿泊する者が出てきている。北京や上海などの大都市では問題ないが、多くの地域ではまだ違法性を問われかねない。

（４）100 元未満の宿泊施設の機能と分布特性

100 元未満の宿泊施設は 179 軒もあり、その内実是多様である。規模は数部屋から多くても 50 部屋くらいで、建物は 2 階建てから 4 階建てが主流である。施設名称には、賓館や飯店も稀に使われるが、圧倒的多数は招待所の看板を掲げる。旅館や旅社と名乗るところも少数ながら存在する。組織が経営主体となる場合もあるが、個人や家族や小規模な集団で経営しているところが大多数を占める。ビルの一部や戸建て住宅を購入したり賃貸契約したりして、宿泊施設として営業しているところもある。

宿泊客層は、低料金志向の国内観光客・ビジネス客から、銀川へ来る様々な来訪者まで、宿泊施設の内実と対応して多様である。銀川に一時滞在する来訪者としては、例えば、銀川経由で他地域へ向かおうとする乗り継ぎ客、銀川で仕事を探す出稼ぎ労働者などが挙げられる。

第 1 図からはこの階層の宿泊施設が集積する傾向が如実に読み取れる。宿泊施設の機能と立地特性から分類するならば、相互に関連する要素も少なくないが、(a) インナーシティ型、(b) バス停・寄せ場隣接型の二つに大きく分けられる。

（a）インナーシティ型

口絵写真 3 に黄色で示した旧市街地繁華街、南門広場からその西南の清真寺にかけての一带は、解放前からの都市の履歴を引き継ぎつつ、主に 80 年代に開発された地域である。最近の再開発で刷新されたところもあるが、建造物や都市インフラの老朽化が著しいインナーシティとなっている（写真 4 参照）。インナーシティに立地する低層の宿泊施設は、80 年代に開業した比較的まともなところが多いが、老朽化が進むも再投資する余裕がないので、100 元を割り込む宿泊料金で集客を試みている（写真 5 参照）。客層は主に低料金志向の国内の観光客やビジネス客である。

繁華街の周縁部に位置するインナーシティでは、一つのビルを複数の経営者が賃貸して、宿泊業を中心とした雑居ビルになっていることがある。この類の宿泊施設は、たいてい「午休（午後の休憩）」と「洗浴（シャワーあり）」の表示があり、客室の時間貸しが常態化している。結果として、日本のラブホテルのような利用法をする人たちも存在する。また、1 階のフロント部分で雑貨屋や食料品店など、何らかの商業活動を行うことも珍しくない。宿泊施設だけが入る雑居ビルで、1 階のフロント部分において全て発廊（美容院）を営み、2 階以上に客室を持つ事例もあったが、これらは日本という風俗営業店舗に他ならない。



写真 5 80 年代建設の老朽化したホテル

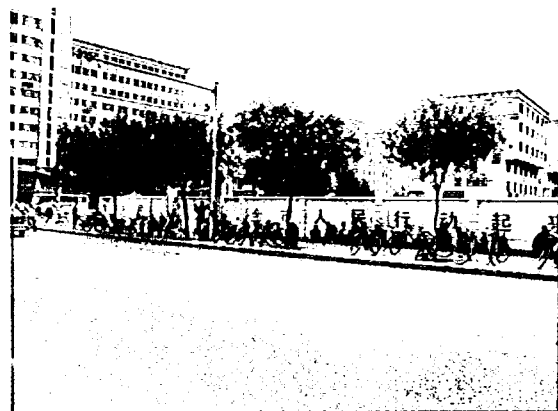


写真 6 露天の日雇労働市場

(b) バス停・寄せ場隣接型

銀川市旧市街地には二つの大きなバス停があり、いずれの近くにも日雇労働者が仕事を求めて集まる寄せ場が存在し、格安の宿泊施設が集積している。宿泊施設の主な利用者は、銀川経由で他地域へ向かう一時滞在のトランジット客、銀川に来たけれどもまだ仕事が見つからない出稼ぎ労働者たちである。

第1図の東北端のBSが、2000年から運営を始めた銀川旅游汽車站である。上海路と清和北街が交差する銀川旅游汽車站界限には、20数軒の安宿が存在し、その交差点の西北に露天の日雇労働市場が立つ（写真6参照）。この上海路沿いはまだ都市開発が始まったばかりで、建設業での労働力需要が高い。加えて、紅花渠の東側には北環批發市場が立地していて、荷物の積み降ろしなどの労働需要もある。

この日雇労働市場は、市街地の拡張と連動して、2004年頃から自然発生的にできたもので、行政側からの管理や保護は基本的に受けていない。労働部門の役人や公安がたまに見回りにくる程度である。早朝は数百名から千人近い求職者が集まり、屋台も出て賑わう。昼を過ぎても2、3百名が清和北街沿いに座り込み、手配師から声がかかるのを待つ。求職者の大半は寧夏の他地域から来た人々で、銀川郊外のスラム化した農村に住み着き自転車を通う人が多く、近くの宿泊施設から通う者は少ない。ここで仲介される仕事は、1日契約の建設労働か市場での雑用が主で、職場も日雇労働市場から近いところばかりとのことであった。

1980年代に建設された銀川汽車站は、旧市街地で最も客運量の多いバス停であり、銀川市内の観光名所となっている南門広場の東側に隣接する（第1図参照）。銀川汽車站の北側には銀川労働就業服務局が、清和南街を跨いだ東側には銀川外来労働力市場がある。銀川汽車站の周辺には、単位や個人が運営する小規模な職業紹介所の類も多い。この界限には50軒を優に超える安宿が立地していて、清和南街の西側の安宿には国内観光客や一時滞在者が、その東側の安宿には求職に来た出稼ぎ労働者が滞在する傾向が強い。銀川汽車站周辺の安宿の宿泊料金は、安いところなら1ベッドあたり10元から、ツインやトリプルでも1部屋で50元くらいまでである。

銀川外来労働力市場は、閉鎖された農貿市場の跡地を利用して、2001年に銀川市政府が開いた。早朝は2、3千人の労働者で溢れ活気に満ち、大通り沿いにはワゴン車やピックアップトラックがずらりと並ぶ。農貿市場自体は面積が小さく、数百名も入れば一杯になる。農貿市場のなかで特別な就労サービスが提供されるわけでもないのに、労働者たちは市場外の路上に出て、手配師たちと直接仕事の交渉をしている。「銀川市流動人口就業服務中心」の看板を挙げた詰め所のなかに、数名の制服役人が常駐しているが、たまにふらっと外を巡回して、手配師と労働者たちとのやりとりを遠巻きに探る程度である。昼過ぎになっても、数百名から1千人近い労働者たちが居残る（写真7参照）。

銀川外来労働力市場で仲介される仕事は、銀川市内だけでなく、寧夏各地や沿海部のものもある。建設労働が主流であるが、工場労働も少なくない。雇用形態は1日契約の求人もあるが、長期間働くのが前提の雇用が基本である。若い女性の求職者もかなりいて、銀川市内のサービス産業や銀川郊外の工場などからの求人が多い。男女ともにここに集まる労働者たちは、銀川郊外や寧夏各地から出てきた人が多数を占め、

回族よりも漢族の方が多い。

労働者がたむろするあたりだけで、40軒あまりの安宿が立ち並ぶ。経営規模が小さいので、部屋数にすると全体で500室を上回ることはない。しかしながら、二段ベッドが並ぶ8人部屋や12人部屋も多いので、ベッド数で見積もるならば、2千人くらいは軽く収容できるであろう。宿泊料金は大部屋ならば1ベッドで数元から十数元くらい、ツインやトリプルでも1部屋50元もしない。銀川汽車站に到着した出稼ぎ労働者たちは、たいてい一旦はこの界隈の安宿街に落ち着く。求職活動が長引くようであれば、身内や友人の助けなどを借りて、安宿街を出て紅花渠を渡ってスラム²⁰に入り、より安価で恒久的な住環境を探す人が多いらしい。紅花渠沿いに立ち並ぶ安宿街は、長期滞在ならば宿泊料金の値引きがあり、寄せ場生活とスラム生活との間をつなぐ宿泊施設となっている（写真8参照）。

出稼ぎ労働者が集う銀川外来労働力市場は、成立した直後から、治安が悪く騒がしく、周辺住民からの苦情が絶えない問題地域として立ち現れ、行政側もその存在を強く意識したことは容易に想像できる。一方で、1980年代にできた銀川汽車站は、老朽化が激しく発着便が多いためパンク寸前で、周辺道路は常に交通渋滞に悩まされる状態であった。再開発の対象となった銀川汽車站は、現在地から南へ約3キロの上前城地区に移転することが決まり、2008年8月に完成予定である。この移転と連動して、銀川外来労働力市場も上前城地区に移転して、出稼ぎ労働者に格安で臨時ベッドを提供する臨時生活区域も併設する計画が立ちあがっている²¹。都市化の進展と迷惑施設の郊外化が連動する事例は数多いが、中国内陸部の都市の片隅でも、グローバルな資本の論理のもとで、急速な都市空間のリストラクチャリングが起こっている。

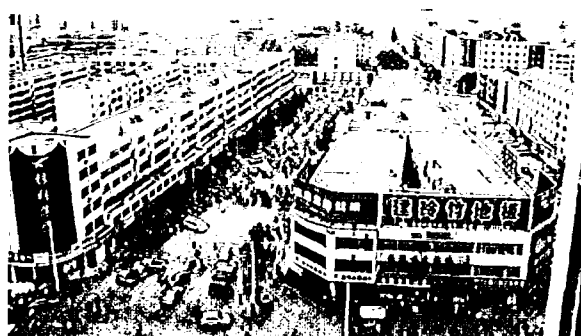


写真7 銀川外来労働力市場の概観



写真8 紅花渠沿いの安宿街

4. おわりにかえて

結節性の高い宿泊施設の機能と分布特性の考察は、都市の構造やダイナミックな変容を解明するうえで、極めて重要な示唆を与えてくれる。ただし、観光客向けの宿泊施設のみに注目していると、都市の成長を根底で支えるダイナミズムを見失いかねな

²⁰ 中国ではスラムという用語は使わず、急速な市街地化の波に呑み込まれた農村という文脈で「城中村（urban village）」と呼ぶ。実態はまさにスラムそのものである。

²¹ 「銀川南門労務市場設施落後擾民嚴重亟待搬遷」、『寧夏網』（<http://www.nxnet.cn/>）より。

い。急速な経済発展を遂げつつある現代中国の発展途上地域を見ていると、日本的な感覚ならば、近世と現代とが共時的に混在して、長く分厚く存在するはずの近代が欠如している、との印象を受ける。1泊1万円を超えるホテルで富裕層が豪遊する状況と、1泊百円程度の安宿に泊まり数十円で空腹を満たし仕事を探す状況。これが同時代の同地域に共存しているのが現代中国である。胡錦濤が唱道する「和諧社会」は時宜を得た政策であるが、その実現への道のりは遠く険しい。

本稿において、例えば、地方の主要都市で「寄せ場」が形成され、寄せ場経由でスラム住民が増え、寄せ場やスラムが問題地域化したら郊外へと移転させられつつある、という知見が得られたことは貴重であろう。都市空間の新陳代謝やリストラクチャリングと宿泊施設の機能や分布特性との間に、強い相関関係が存在するとの知見も、広範な宿泊施設の内実を見据えることで得られた。このような観点や手法は、経済発展が著しい国家の発展途上地域のダイナミズムを考察する上で、重要な鍵となろう。